

〈書 評〉

一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授） 他 編著
佐 藤 進（日本女子大学教授）

講座 障害者の福祉 第一巻

障害者の福祉と人権

斉場三十四（熊本託麻台病院保健福祉次長・医療ソーシャルワーカー）

本書は障害者福祉について『人権としての福祉』を中心の論点としている。

障害者の人権という次のやりとりを私は思いだす。

検疫医師『君には種痘はできない』障害者『何故ですか？』検疫医師『脳性麻痺だからだ』障害者『しかし、海外旅行で必要だし私は過去に予防注射はすべて受けてきました。今迄医師からそんな指導は受けた事はありません。是非注射して下さい』検疫医師『いやだめだ』障害者『こまったなあどうしたら良いのでしょうか？』看護婦『イギリスは予防接種無しで入国できますからあなたにはアレルギー体質という証明書を書きます』障害者『エ、冗談じゃない、アレルギー体質でもありませんし脳性麻痺だから必ず種痘後脳炎を

起こすわけでもありません。公的にそんな証明を勝手に発行されては困りますので証明書はいりません』これはフィクションではなく、数年前検疫所の医師等と障害者である私自身とのやりとりである。

私は海外旅行の前に『脳性麻痺だから』という理由で予防注射を厚生省直轄の医師に責任がとれないと拒否されたのである。

そんな事を思い出しながら医療ソーシャルワーカーとしてもまた私自身の問題としても本書は非常に興味深く読破させて頂いた。

私は職業柄『医療・福祉等の関係者は障害者の立場に立つ』とか『障害者の人権や福祉を守る』とかいうコトバは身近に良く聞くのであるが上記のような出来事が私自身の上にも起きたのである。

国際障害者年は『人権について

の基本的理念』の実現のため1981年設置され、その後の10年間は行動年になっており、我々専門家にも多くの課題を提議している。

私達を取り巻く福祉や医療の環境条件は財政再建の下で非常に厳しい情勢を迎えており『障害者の福祉や人権』問題を正しく理解しておく必要が生じているともいえる時期だけに障害者に対する共通の理解や基本的理解を深めておきたい。

その意味で本書は『障害者の人権』の問題を正面に据え、内容的には非常に示唆に富んでおり『障害者福祉の現状や歴史・障害者運動・障害者の人権や権利』等について要領良くまとめられている。

日頃、障害者の医療や福祉に携わる者として『障害者との接点』を基本的に考える上で興味深い内容であり、貴重な一冊として手元に置かれ、是非とも読み通される機会を持たれる事をお進めしたい本である。

（A 5，頁 302，1987，¥2,600，
光生館 刊）